九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中村幸彦著『近世小説氏の研究』

田中，道雄

https://doi.org/10.15017/12315

出版情報：語文研究. 13, pp.54-58, 1961-10-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

中村幸彦著『近世小説史の研究』

田中道雄

共に刊行された『近世作家研究』に並ぶ、先生最初の論文集。大学御卒業後二十五年間に発表された多数の論文から、近世小説史に関する主要な十二編を選び、一書とされたもの。滑稽本・黄表紙を除く近世小説全様式にわたる各論考は、上梓にあたって補正され、通読すれば近世小説史のほゞ全域を隆時的に把握できるよう配慮された。次にその内容を要約する。

「近世文学の特徴―緒言にかへて―」　近世文学に二階級があり、雅文学が実生活から遊離するのに対し、俗文学は教訓性、娯楽性などの実用性を持っていた。それはまた需要供給の自給自足体制と様式に多様性を持つこととなり、楽屋落の文学即ち約束の文学となった。その結果、表現に彫琢を凝らし、名人芸的作風を生んだ。

「仮名草子の説話性」　「仮名草子」の語を当時の通用に従い小説的作品以外を含めた広義に規定する。仮名草子の一特徴を表現に関して求めるなら、それは口誦性であり、その母胎として啓蒙的な世相に応じて出現した、さまざまな講談など口誦的なものがあるとして、実態とその変化を示す。次いで仮名草子の分類に移れば、中世の多様な散文文学の系統の流入度の低いものほど、創作された近世的要素が先の口誦的なものと関連して見出される。

「西鶴の創作意識とその推移」　西鶴作品は当時既に一流文学と同一視され、西鶴もまた自らの作を「慰み草」と称しつゝ、「物の本」にある種の対抗意識を持っていた。それは雅文と同一視された俳諧的文章を用いたことからも、人生問題を作品中に盛り込もうとしたことからも窺える。さて西鶴は、新俗の現象を通して詩を見出し、即ち即物的姿勢でもって創作しようとしたが、説奇と談理の説話様式を選んだ表現もまた即物的であった。始め、説話様式のうち人生探求の度を示す談理の面より、面白さを伝える説奇の面に専らであった西鶴の関心は、中頃俗物的な「道」の談理を行い、それを経た晩年、「世間智」の談理、万人に替らぬ一心即ち世の人心に移る。事物に対する即物的な姿勢から人心の即物的な把握へと辿り、こゝでは説奇と談理が一つになる。

「自笑其積確執時代」　既に説かれたこの事件の発生から結末に至る経過に、「最も正直な当時の出版物に就いて」、詳密厳正な書誌学的考証を加え、事件が其積側にとって悪かったと結論。この文学史的意義は、作者と書肆の問題が出版機構の中に提起されたこ

と、またこの間の作風の転換により、小説の功利的実用性が教訓性や報道性などを去って、穏健な娯楽性となっていったため、人生との関係は稀薄化し、文学としては退歩したが、一面、芸術としての純粋さを得て、小説の社会的存在意義の前進を見たことにあった。

「八文字屋本版木行方」　前編同様、資料考証に基いて、八文字屋から升屋への版木譲渡、八文字屋の没落、改題出刊を目論んで思惑はずれた升屋の再譲渡に至る顚末を明らかにし、その原因として、自矣其績の確執に現われた小説の商品化が更に進み、作者と書肆の関係も、専属作者制度から潤筆料による自由な新営業法へと発展する出版界の新気運、それに立ち遅れた上方、就中八文字屋、升屋の保守性を指摘する。この出版機構の資本主義化は著しい読者の増加によるが、新しい大衆読者層の嗜好は依然として八文字屋本にあり、津々浦々に普及した貸本屋がそれを媒介した。

「安永天明期小説界に於ける西鶴復興」　安永天明期の小説に見える西鶴作品の影響を個々の作家作品について考証し、その関心が作者のみならず、読者書肆にも見えた小説界一般の風潮なることを示して、さらに宝暦期小説の停頓混乱の諸現象の例挙の後、これらが浮世草子の内容的行きづまり、作品が類型化され、素材採択の自由が失われたことに起因するとする。小説作者は、小説技巧では優れた其績よりも、西鶴の人情を穿った写実的表現を認めたが、西鶴の人生凝視の深さをくみ取る者は、時代の戯作的風潮によるとは言え、少数思想家に過ぎなかった。

「洒落本の発生」　始めに従来の洒落本発生説を挙げて検討する。漢文戯作濫觴説が二者の単なる外形や環境の共通に依拠するを非とし、全表現の対比によるべきと説き、会話体表現を洒落本の一特質として源流を求める説からは、歌舞伎狂言本の卜書形式が洒落本の会話体形式に影響したことのみを肯定する。次いで先行文芸に系譜を求めれば、上方における「煙華漫筆」が倡家遊楽に素材を求めるのは浮世草子に倣ったものであり、殊に論議風洒落本は浮世草子より突然変異したこと、「月花餘情」「聖遊廓」は会話体の形式と会話を狂言本や院曲に得たこと、一方江戸においては、談義本がその文体と穿ちの発想法を、世に流行し諷刺諧謔をこととした舌耕文学狂講に倣って、洒落本へと変貌していたことを見出す。「異素六帖」「吉原大全」を経て出現した「遊子方言」こそ、この上方の会話体形式・意匠装釘・江戸の文体・穿ちの発想法を兼ね備えたものであった。

「通と文学」　遊里に発生した「通」の語の性格を分析して箇条的に説明し、通が文学理念ではなく生活理念たること、洒落本が通の教科書と見えるのは、談義本の教化的風躰を外形に持ち伝えているための誤解で、本質はそのようなものでなく、通は洒落本の理念でなくて、その穿ちの対象であると結論する。また洒落本、黄表紙を作った前期戯作者にはこの通人意識が宿り、彼らは小説道の通人であった。

「読本発生に関する諸問題」　読本が単なる中国白話小説の模倣でない証左として、白話小説に学んで読本とならぬ作品例を挙げ、読本の特質を求めて、当代の「作り物語の娯楽読み物」なる概念を抽出し、実用的な夾雜物を捨てて当時なりの芸術的創作を目的とした点は、小説史上重視すべきであるとする。この新しい読本と、か

って読本と呼ばれた八文字屋本の時代物とを比較すれば、共に時代長編小説であるが、近代小説に近づくべき要素としての構成の妙、芸術的真実性、超時代的文体、歴史小説的傾向、性格の一貫性、思想性などを八文字屋本は欠き、これら諸特徴を兼具したものとして白話小説があった。そしてこの白話小説流行の背景として、小説界には、講談の流行と実録の読物化、怪談小説の愛好、仏教傾向文学の流行の三潮流があり、それぞれ構成・芸術的真実性・思想性において、読者を白話小説へと志向させるものを持ち、初期読本発生の母胎となったとする。また、戯曲によらぬ直接の史書古典からの取材、和漢雅俗を取りまぜた文体も白話小説に学んだであろうが、読本の雅趣を高めた。後期読本の作者達は、読本の諸特徴を尽く備えるのみならず、白話小説に珍らしい霊験・仇討・御家騒動を構成要素として長編とする仏教長編説話を見出し、創作の範としたが、中国白話小説に並んで読本に影響した様式であると結ぶ。

「読本展回史の一駒」　後期読本の嚆矢として江戸に出た「忠臣水滸伝」は小説界に波紋を投げた。対抗する京都刊行の「中将姫一代記」に引き続き、新作者に欠乏した上方では仏教長編説話の長編読本化が多出するが、これは当代の「一代記」物流行の各面にも作用されたのである。一方江戸でも、馬琴がこの仏教長編説話応用を上方に学んでからは、次第に読本の趣向、素材・文飾源となり、東西相競って作風も新味を加えたが、仏教長編説話から充分に摂取した馬琴が、歴史小説的方法を物してからは、読本史は新たに展開し、江戸風中心となる。

「読本の読者」　享保以後、教養の低い読者が増加し、小説読者層に教養人向、大衆向二つの階層が生じたこと、前期戯作者は教養人階層に属したが、後期読本では専ら読者にまわったこと、読本は主に貸本屋を通じて大衆に読まれ、書肆を大いに利したが、読本が、教養人の求める思想性と、商品化のため一般大衆の好む「慰み」とを兼具すべきとの要件は、作者を大いに苦心させたこと、また、読本に関して、戯作的ながら体をなした批評と批評家が発生したことは、その社会的地位の向上として認むべきであるなどを説く。

「人情本と中本型読本」　多くの先行文学の要素を含む人情本の系統を説明するのに、読本・洒落本などと人情本の中間に中本型読本を位置させ、その特質が、読本的規格にしばられぬ自由さ、文章の平明、世話物乃至時代世話物の題材、演劇との関連などにあったため、洒落本合巻物滑稽本さまざまの様式を取入れることを得た様式であったことを証する。

以上の後語に、先生は「各々の様式が、中世の説話的な散文文学から、近代小説へと推移する流の中で、何を脱皮し何を新しく加へたかに、歴史的意義を見出さうとし」、それを「近代的観点から評価しがちになることを恐れて、何ごともその時代の意識に即した理解によつて処理しようと」ひそかに心されたと述べられる。一読した者は、本書の方法がその二点に貫かれることを容易に理解するであろう。前者について言えば、仮名草子・洒落本・読本・人情本に関する諸論考において、例えば「全体を見通して、白話小説の如何なる特質が、読本全体の如何なる特質を如何にして培つたか、さうした作用が如何なる環境の下に進展したか」（P246）の如き系統論の展開に蓬着する。前代にあったさまざまな様式（外国文学も含め

て）の系統がいかにうけつがれたかの調査、あるいは様式を要素に分解し、そのそれぞれの源流を先行文学に求める作業を、文学史的に素直な方法とお考えになり、よって発生の問題が、歴史的研究の最重要部分として重視される。しかし先生は、形態の変化のみを解析されるのではない。これを裏付けるものとして、それら様式に携わった人々、作者から読者書肆に至る意識をさぐり、その時代背景にも心される。一編を成す西鶴論においては勿論、馬琴一九等作家の文学観、様式観、美的理念についての、または創造過程における意識を追求し、あるいは近世文学が二階級に分かたれる根拠を近世人の意識に求め、全論考の基礎となる素材資料は、その時代の意識の中に戻して検討の上使用されている。文学研究に科学的客観性を求められんとするこの二視点は、言うならば先生の方法における経と緯に例え得ようか。

ここで前者に関してさらに思えば、先生は系統を論ずる中でも、内容面への留意はもとよりながら、ことに表現研究を重視されるようである。例えば同風潮内にある二作品群の異同弁別は「根本的な構成文体素材等全表現の対比」（P193）によるべきなどと各所に説かれる。近世文学がより表現技法に問題を持つためであるが、文学一般についても、先生は表現面を閑却されない。また後者については、抽象的な当時の意識をさぐる実証的方法として、作品中、または広く当代社会一般に使用された特定用語への注目があるが、これは近世の文学を解するに現代の概念をもってするの愚を排し、対象に即しようとされる態度の帰結であって、古典中に用いられる用語を学術用語として取上げ、内包する概念を用例から帰納して学問的に解説するという形で進められる。例えば、かって言われた西鶴リアリズム論に対して、「事はリアリズムになくして、西鶴の問題である以上、（中略）出来るだけリアリズムなどの意識を導入せずして、彼の時代とその意識に即して、その推移をたど」（P98）らんとし、作品中の「世の人心」の語に着目されるのである。そしてその態度は綿密で「理論的な古典の文章で、一つの抽象名詞が、時代により人によつて違つた概念を持つてゐること」（P67）にも厳しい分別の眼を配られる。「仮名草子」「読本」「通」「穿ち」など、語においてもその歴史性を考慮した概念規定から立論されている。

右に述べた表現研究も用語研究も、具体的には作品を直接の対象として行われるが、先生が対象とされるものは作品に限らない。先生は「文学史は文学生活の歴史」（P14）であると立言された。学究の態度として当然ながら、先生の御研究は、先人の研究をより科学的な判断において検討することから出発するが、その価値判断は、対象を単なる作品としてのみ扱わず、作品を中心とした文学生活として考察することから得られるのである。対象が研究方法を規定する。仮名草子の範疇を広義に拡大するのは、対象である文学生活の構造がかく規制するからである。この文学生活の構造を、先生はつねづね次のように考えておられるようである。図式的に言えば、作品を中心として創作者・伝播者・享受者があり、この最少要件が構成する場を包む環境として、固有の風潮や風躰を持つ壇、流派であり流派の集合である界、それに作用する文学思潮、さらに思想界の動向などが、つぎつぎと外側から取り囲んで行く同心円型の相を見る。しかしこの同心円は文学生活の空間的断面に過ぎず、

文学生活の実態は、その断面が時間的に連続して造る重層であって、同心円の諸成分はそれぞれ歴史性を持ち、またこの文学生活の成分が中心たる作品に及ぼす影響は、時代によってその比重が異なる。この故に、仮名草子において口誦文芸、八文学屋本において書肆作者の問題、安永天明期小説界において西鶴復興の風潮、読本において読者が、文学史研究の重要テーマとなる。すべての様式は一度この文学生活の場に戻して考察されねばならぬ。作品における表現や用語の分析、またその総合も、正しくは文学生活の場において検証され、一作品中から方法を求める危険を避けねばならぬのである。先生が後語に述べられた二点も、この文学生活の時間的空間的諸側面への視角として定位できるであろう。

さて、先生のかかる方法の技術的特質は、あらゆる面における多角的探索と並んで、すべてに資料をふまえた具体的立証にある。先に述べた本書の梗概は、ただに骨格を紹介したに過ぎず、豊かな肉付けとしての重厚精緻な考証を追体験せずして、本書の生命を知ることはできない。先生は日頃「学問は乞食袋、すべての資料をまめに注意せよ。」と諭されるが、時に知識の沃野に遊ぶかに見える先生の博識も、かねての絶えざる資料への親近を物語るものに外ならぬ。

また我々は、先生の研究態度として、柔軟さと周到さを認めることができる。柔軟さは、対象の素直な受入から生まれる。仮名草子の分類において「むしろ中間的なものの存在を認めつつ、歴史を構成してゆく方が、この場合実情に即した歴史研究の態度であらう。」（P31）と対象に適応した方法を採用され、批評書の洒落本認定において標準を守る潔癖さが、かえって選択を誤らせる失を指摘される。周到さは、対象に対するあくなき疑問の提出に始まる。八文字屋本版木行方を追及されては、八文字屋本が流行に遅れながら、なお商品価値を保つ理由を疑い、享保以後増加した新読者階級の存在を想定され、西鶴における伊勢源氏の影響を逆接的として、そこに西鶴の対抗意識を見出される。こゝで重要なことは、系統論展開においても、先生はいかなる先行文芸の特質を捨て、いかなる特質が新たに生み出されたかを御覧になることである。仮名草子における文芸性の空白、八文字屋本における思想性の棄却による歴史的な断絶において、即ち仮名草子の説話性にひそむ近世的価値を見出し、八文字屋本との相違点をもって読本の発生を考察される。このいわゆる先生の引き算、注意深く差異点を求められる方法こそ、対象独自の文学史的意義を見出される手段である。先生の細心さは、先生が退けられた学説にも、その依拠した理由の中に一半の正しさがあることを認め、その何らかの価値を見落されぬ。漢文戯作洒落本濫觴説は、洒落本判定の標準を外形におく事により誤った が、先生はそれを契機として戯作界全体に眼を配り、洒落本が小本形式を採用するに至った原因を推定されるのである。

先生はまた、我々学徒の傾聴すべき戒めの語を、処々に示しておられる。雑多な夾雑物の多い近世文学を理解するには「竹の子の皮をはぐやうに、時代的な皮を、一枚づつ大事にかけてはいでゆかねばならぬ。」（P21）「学問が常に志向してゐる定義化のあざやかさの魅惑ほど、学徒を茶毒するものはない。」（P246）「万事を思想史概説風に公式的に割切つてはならぬ。」（P264）等々がそれである。

徒らに妄言を連ねたを恥じつつも、読了してその内容の重さが与える充足感に、この一書に注がれた先生の精神力と時間とを知る思いである。〔A5版、三六八頁。昭和三十六年五月二十日、桜楓社刊〕